「わたしが行かねば」

府中市の府中公園にあるお堂では、毎年十月六日に、たくさんの人が集まります。

今から百八十年ほど前のことです。

現在の府中市府中町朝日町に藤野昌言が生まれました。

昌言は、天保十三年（一八三二）、医者の家に生まれ、十代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。

十九歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし七日目に府中に着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。

父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。

医者になってからも昌言は、府中市の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ。」と言われるようになりました。昌言は、家での診察だけではなく、往診にも出かけました。そして、治療費が払えない患者には、

「これも薬のうち。」

と、米やみそを置いて帰ることもありました。

明治十二年（一八七九）夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたりげりをしたりする病気で、当時は原因が分からなかったので、十分な治療ができませんでした。うつった人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも、毎晩毎晩、医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。

どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもいられず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療をつづけました。

昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物をぬぎ、ていねいに身体をふいてから家に入りまし

た。

こんな日々が二か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は体がだるく、どうしても診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は、

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさんがかけ込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロリにかかったのでは・・・。お願いでございます。二人の命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、言いました。家族が必死に止めるのも聞かず昌言は、ふらつく足で立ち上がり、

「往診いたしましょう。」

と、答えました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまったまま考えていました。

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて往診に出かけました。診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。

昌言もコレラに感染していたのです。

高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。

昌言四十七歳。十月六日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝の気持ちをこめ石碑を建てました。

このお祭りは、「昌言祭」と呼ばれ、百三十年以上たった今も続いています。